



Title	『上博楚簡』解題：『上海博物館藏戰國楚竹書』 (三) (四) 所収文献
Author(s)	戦国楚簡研究会
Citation	中国研究集刊. 2005, 38, p. 1-43
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/60932">https://doi.org/10.18910/60932</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 「上博楚簡」解題

—『上海博物館藏戰國楚竹書』（三）（四）所収文献—

### 戦国楚簡研究会

#### 序 言

本稿は、「上海博物館藏戰國楚竹書（上博楚簡）」の文獻解題である。これまで戦国楚簡研究会では『郭店楚墓竹簡』所収の全文献、および『上海博物館藏戰國楚竹書』（一）（二）所収の全文献について解題を発表した（『中國研究集刊』第三十三号（別冊特集）、大阪大学中国学会、一〇〇三年）。

また、その成果を受けて、『諸子百家（再発見）—掘り起された古代中国思想—』（浅野裕一・湯浅邦弘編、岩波書店、一〇〇四年）、『竹簡が語る古代中国思想』（浅野裕一編、汲古書院、一〇〇五年）、『古代思想史と郭店楚簡』（浅野裕一編、汲古書院、一〇〇五年）を刊行する

など、精力的な活動を続けている。

その後も、『上海博物館藏戰國楚竹書』の刊行は続き、現時点で第四分冊までが公開されるに至った。研究会では、これら新資料についても引き続き釈読を重ねているが、その最新情報を提供するために、第三分冊および第四分冊所収の全文献について解題を執筆することとした。担当者は、浅野裕一・湯浅邦弘・福田哲之・竹田健二・菅本大二・辛賢の六名である。分担ごとに作成した草稿を持ち寄り、それを全員で検討した上で定稿とした。なお、分担者名は各解題の末尾に記した。

目 次

『上海博物館藏戰國楚竹書』(三) 所收文献	
『周易』	4
『中(仲弓)』	8
『恒先』	...
『彭祖』	...
『上海博物館藏戰國楚竹書』(四) 所收文献	
『采風曲目』	16
『逸詩』	19
『昭王毀室·昭王與龔之牋』	24
『柬大王泊旱』	26
『內禮』	28
『相邦之道』	33
『曹沫之陳』	35
上博楚簡形制一覽	38
書誌情報用語解說(二)	39

一、本稿は、『上海博物館藏戰國楚竹書』（馬承源主編、上海古籍出版社）第三分冊（二〇〇三年十一月）、同・

第四分冊（二〇〇四年十二月）に収録された新出土文献について、戰国楚簡研究会の研究成果を踏まえて解説を施すものである。なお、この資料群の総称については、通称の「上博楚簡」とする。

二、各資料の解説は、（1）書誌情報、（2）資料の概要および研究状況、（3）主要釈文・注釈・研究から成る。

三、（1）の書誌情報に関する専門用語については、『中國研究集刊』第三十三号（別冊特集『新出土資料と中國思想史』、二〇〇三年）掲載の「書誌情報用語解説」および本号掲載の「書誌情報用語解説（二）」を参照。また、篇長・編綫間などの長さの単位はcmである。

四、『上海博物館藏戰國楚竹書』に掲載された原釈文を本稿では「釈文」と称し、（3）には重ねて掲載することはない。なお、『上海博物館藏戰國楚竹書』第三分冊・第四分冊所収文献は、公開されてあまり間がないこともあり、現時点では、いわゆる紙媒体で発表された論文よりも、「簡帛研究」網站などインターネット上に発

表された論考・札記類が多い場合もある。本稿では、可能な限りインターネット上の先行研究も捕捉するこどし、その場合には、ネット上での掲載年月日を附記した。

五、「戰国時代」の開始年については諸説があるが、本稿では便宜上、紀元前四〇三年説を採用する。紀元前二二一年の秦帝国成立までの一八〇年間を三等分し、紀元前四〇三年～三四三年を「戰国前期」、紀元前三四二～二八二年を「戰国中期」、紀元前二八一～二二二年を「戰国後期」と称することとする。なお、郭店楚墓の墓葬年代（造営時期）について、『郭店楚墓竹簡』は「戰国中期偏晚」と説明し、上海博物館は上博楚簡の展示解説文に「戰国晚期」と記すが、これらも、それぞれ便宜的な時代区分によるものである。ちなみに、上海博物館の時代区分は、「戰国早期」「戰国晚期」の二分法であり、その場合の「戰国晚期」とは、本稿における「戰国後期」と同義ではない。上海博物館元館長の故・馬承源氏の見解によれば、上博楚簡の成立時期は、むしろ本稿における「戰国中期」に相当する（詳細については『中國研究集刊』第三十三号（別冊特集『新出土資料と中國思想史』、二〇〇三年）掲載の「上博楚簡総論」参照）。

## 『周易』(しゅうえき)

### (1) 書誌情報

竹簡全五十八簡。字数は計一八〇六字。簡の長さは四四cm、幅〇・六cm、厚さ〇・一二cm前後。一簡につき約四十四字の文字が書かれている。文字の大きさや字の間隔など、整然と書写されている。六十四卦中、約半分にあたる三十四卦が含まれており、一卦につき竹簡二・三本が使用されている。

### (2) 内容と研究概況

このテキストでは各卦ごとに卦画・卦名・「首符」・卦辞・爻題(初・二・晶(三)・四・五・上)・爻辞・「尾符」の順に記されている。その順序は今本・帛書本・阜陽本と基本的に同じであるが、ここで最も注目されているのが、卦名の直後と爻辞の末尾に付されている、從来知られていなかつた符号である。この内、卦名直後にある符号を「首符」と呼び、爻辞の末尾にある符号を「尾符」と呼ぶ。符号は一般的に六種類と理解されているが、九種類とする説もある。但し、これらの符号がいつたい何を意味するものなのかについては、未だ解明されていない。

卦の順序については、一卦ごとに簡を改めているため本来の卦序を復元することは極めて困難である。内容の公開後、各卦の首尾符号を基準にして卦を分類し、それを手掛かりに卦序を推定しようとする試みが行われてきたが、いまのところ、今本卦序との部分的な関連性が認められてはいるものの、現段階ではまだ全体像に対する理解までには至っていない。

卦画は陽爻と陰爻の組合せによる六爻から成る。卦画・卦名・卦爻辞の内容は、今本・帛書本・阜陽本と比較して、若干の字句の異同は見られるものの、基本的には同一である。また、楚簡『周易』には、易伝の類は含まれていない。

なお、楚簡『周易』に関するこれまでの研究論文、および簡帛研究ホームページに掲載されている研究報告については、(3)における⑨近藤論文によく整理されている。

### (3) 主要釈文・注釈・研究

- ① 麗名春「楚簡『周易』校釈記(一)」(『周易研究』二〇〇四年第三期、二〇〇四年六月)
- ② 麗名春「楚簡『周易』校釈記(二)」(『周易研究』二〇〇四年第五期、二〇〇四年十月)
- ③ 劉大鈞「今、帛、竹書『周易』疑難卦爻辞及其今、古

- 文辨析（一）」（《周易研究》二〇〇四年第五期、二〇〇四年十月）
- ④劉大鈞「今、帛、竹書《周易》疑難卦爻辭及其今、古文辨析（二）」（《周易研究》二〇〇四年第六期、二〇〇四年十二月）
- ⑤劉大鈞「今、帛、竹書《周易》疑難卦爻辭及其今、古文辨析（三）」（《周易研究》二〇〇五年第一期、二〇〇五年一月）
- ⑥姜広輝「上博藏楚竹書《周易》中特殊符号的意義」（簡帛研究網站、二〇〇四年五月十六日）
- ⑦李尚信「楚竹書《周易》中的特殊符号与卦序問題」（《周易研究》二〇〇四年第三期、二〇〇四年六月）
- ⑧張桂光「楚竹書《周易》卦序略議」（張桂光《古文字論集》中華書局、二〇〇四年十月）
- ⑨近藤浩之「上海博物館藏戰國楚竹書《周易》の「首符」「尾符」」（《中国哲学》北海道中国哲学会、第三十三号、二〇〇五年三月）
- ⑩大野裕司「《周易》蒙卦新解—上海博物館藏戰國楚竹書《周易》核卦に見る犬の民俗—」（《中国哲学》北海道中国哲学会、第三十三号、二〇〇五年三月）
- ⑪劉大鈞「今、帛、竹書《周易》綜考」（上海古籍出版社、二〇〇五年八月）
- ⑫廖名春「楚簡《周易》遯卦六二爻辭新釈」（《周易研究》二〇〇五年第四期、二〇〇五年八月）
- ⑬謝向榮「試論楚竹書《周易》紅黑符号对卦序与象數的統合意義」（《周易研究》二〇〇五年第四期、二〇〇五年八月）
- ⑭房振三「竹書《周易》彩色符号初探」（《周易研究》二〇〇五年第四期、二〇〇五年八月）

〈卦名对照表〉

阜陽周易	帛書本「繫辭」	帛書本	楚簡本	今本
肫	鍵	鍵		乾 1
蒙	川	川		坤 2
	肫	屯		屯 3
		蒙		蒙 4
		襦		需 5
		訟		訟 6
帀	容	師		師 7
比	師	比		比 8
	比	少		小畜 9
履	小蓄	蓺		履 10
		禮		泰 11
		奈		否 12
		婦		同人 13
同人	婦	同人		大有 14
大有	大有	大有	[大有]	謙 15
豫	嫌	嫌	歷	豫 16
隨	余	餘	參	隨 17
	隋	隋	陵	蠱 18
林	林	箇	蠱	臨 19
觀	觀	林		觀 20
筮	筮蓋	觀		噬嗑 21
闢	·	筮蓋		賁 22
僕		繁		剝 23
復		剥		復 24
无亡	復	復	復	无妄 25
	无孟	孟	忘	大畜 26
	大畜	泰	大塗	頤 27
頤		頤	頤	大過 28
大過	大過	泰過		坎 29
		習贛		離 30
離	羅	羅		咸 31
	恒	欽		恒 32

今本	楚簡本	帛書本	帛書本「繫辭」	阜陽周易
33 遯䷠				豫
34 大壯䷡	賸	據 泰壯	大莊 · 大牀 · 口壯	
35 晉䷢		潛		
36 明夷䷣		明夷		明口
37 家人䷤		家人		
38 睽䷥	樞	乖	家人 詛	
39 好䷴	許	蹇		蹇
40 解䷹	解	解		
41 損䷨		損	損	損
42 益䷩		益		
43 夬䷔	夬	夬		
44 姤䷭	姤	姤	均 · 句	
45 萃䷬	噬嗑	噬嗑		
46 升䷵		升	登	登
47 困䷮	困	困		井
48 井䷯		井	井	鼎
49 革䷰	革	革		艮
50 鼎䷱				
51 震䷲				
52 艮䷳	艮			
53 漸䷴	漸			
54 歸妹䷵		歸妹	歸妹	
55 豐䷶	豐	豐		
56 旅䷷	遯	旅		旅
57 翼䷸		筭		
58 兌䷹		奪	說	
59 漢䷺	弊	渙	喚	
60 節䷻		節		節
61 中孚䷼		中復		
62 小過䷽	小过	少過		口過
63 既濟䷾	[既濟]	既濟	既濟	
64 未濟䷿	未濟	未濟	未濟	

## 『中弓』(ちゅうきゅう)

### (1) 書誌情報

書名は、第十六簡の背面に記された篇題「中弓」による。「中」は「仲」の初文。仲弓は、孔門十哲のひとりとして知られる冉雍の字である。『上海博物館藏戰國楚竹書(三)』の「釆文考証」(李朝遠氏担当)にもとづき、書誌にかかる概要を以下に記す。

現存簡は二十八簡、整簡は三簡(第八簡は三つの断簡を綴合、第十簡・第二十三簡は二つの断簡を綴合)、他の二十五簡は断簡。整簡の全長は四十七cm前後、字数は三十四～三十七字、編縄は上・中・下三編、第一編縄から簡の上端までの距離は約〇・八cm、第三編縄から簡の下端までの距離は約一・六cm、第一編縄から第二編縄までの距離は約二十三cm、第二編縄から第三編縄までの距離は約二十一・七から二十三cmの間。字数は全部で五百二十字、その中に合文十六、重文四が含まれる。なお、文義に関連が認められ、字体も合致するが、『中弓』の他の竹簡に比べて字間が狭く、竹簡の色も異なるために「附簡」とされた断簡一簡(二十四字)がある。

【附簡】

『中弓』は大部分が断簡であり、篇全体においても缺失簡の存在が想定されるため、内容の把握はきわめて困難な状況にある。ただし、個々の残簡から得られる断片的な内容を総合的に踏まえると、孔子と仲弓との問答によつて構成されていたようであり、内容はすべて政治に関するものと推測され、しかも主題を異にするいくつか

『中弓』の釆文については、「簡帛研究」網站を中心にして李朝遠氏の釆文に対する修正意見が提出されており、なかでも陳劍「上博竹書《仲弓》篇新編釆文(稿)」は、全簡にわたって再検討を加え、残簡の綴合や釆読の補正など従うべき点が多い。今後の『中弓』解説は、陳氏の釆文を中心に行われことになると思われる所以、以下に残簡の綴合にかかる陳氏の修正案を示しておく。(1)の算用数字は竹簡番号、／は前後の簡文が連続しないことを示す)。

【1】／【4】-【26】／【2】／【5】／【7】／  
【8】／【9】-【10】／【28】／【19】／【14】／  
【27】-【15】／【18】／【17】-【11】-【13】／【6】  
-【23B】-【23A】／【24】-【25】／【20A】／【12】  
-【21】／【22】／【16正背】／【3】／【20B】／

のまとまりから成り立っていた形跡がうかがわれる。そのなかでもとくに注目されるのは、以下のごとく『論語』

子路篇「仲弓爲季氏宰」章との間に密接な対応をみせる一群の残簡が存在する点である。

### 『中 矢』

### 『論語』子路篇

仲弓曰、敢問、爲政何先。【5】

〔仲尼曰〕、老老慈幼、先有司、舉賢才、宥

過赦罪。【7】……

……罪、政之始也。

仲弓曰、若夫老老慈幼、既聞命矣。夫先有

司、爲之如何。

仲尼曰、夫民安舊而重遷。【8】……有成。

是故有司不可不先也。

仲弓曰、雍也不敏、雖有賢才、弗知舉也。

敢問、舉才。【9】如之何。

仲尼曰、夫賢才不可弇也。舉爾所知。爾所

不知、人其舍之諸。

仲弓曰、宥過赦罪、則民可參。【10】……

仲尼曰、〔28〕……山有崩、川有渴、日月

星辰猶差、民無不有過。賢者□。【19】……

仲弓爲季氏宰、問政。  
子曰、先有司、赦小過、舉賢才。

曰、焉知賢才而舉之。

曰、舉爾所知。爾所不知、人其舍諸。

『中弓』の他の部分には、『論語』を含む伝存文献との対応はみられないようであるが、ここで注目されるのは、以下のごとく、『論語』対応部分とそれ以外の部分との間に孔子に対する呼称や第一人称の人称代詞の用字に相違が認められる点である。

「中(仲)尼」 「而(爾)」 || 『論語』対応部分

—

「孔」(孔子) 「女(汝)」 || 他の部分

こうした現象は、『論語』対応部分がそれ以外の部分とは異なる来源によって形成されたことを示唆しており、『中弓』の成立過程を考察する上に一つの手がかりを与えるものと考えられる。

『論語』対応部分以外の竹簡の大部分は、相互の関係が不明であり、『中弓』篇の全体構成については十分に把握し難い。ただし【1】【4】【26】にみえる以下の部分は、季桓子の宰となつた仲弓が、孔子に政治についての助言を求める内容であり、これに続く一連の問答の場面設定としての機能を認めることができる。【1】の竹簡は上端が完存しており、その内容から『中弓』の冒頭簡であつた可能性が高い。

季桓子、仲弓をして宰と為さしむ。仲弓以て孔子に告げて曰く「季氏……雍をして宰夫の後に従わしむ。雍や童愚なれば吾子に差はずかしめを貽すことを恐る。願わくば吾子に因りて治めん」と。孔子曰く「雍、汝……」

この部分は、先に示した『論語』子路篇「仲弓爲季氏宰」章の冒頭「仲弓、季氏の宰と為りて、政を問う」を敷衍した形となつており、しかも『論語』に比べてはる

かに入念な表現がとられている。「願わくば吾子に因りて治めん」との仲弓の発言は、季氏の宰としての仲弓の政治が、孔子の意をうけて実践されることを明言したものであり、見方を変えれば、季氏の宰としての仲弓は、政治に関する孔子の発言を引き出す装置として機能している。『中弓』の冒頭部分をこのように理解するならば、これ以後に展開される孔子と仲弓との問答は、言わば政治論の性格をもつものであつたと推測される。

こうした観点から『中弓』の残簡を分析してみると、以下のごとく『論語』対応部分に認められた民の統治・教化にかかる言説が、他の残簡にも少なからず見いだされることに気付く。『論語』対応部分以外に見える「民」字を含む竹簡を総合部分もあわせて掲げると以下の通り

である。

……仲弓曰く「敢えて民の務めを問う」孔子曰く「善きかな、以て教うるに足るを問えり。君……」（27）

【15】

……刑政は緩めず、徳教は倦まず」仲弓曰く「此の三者の若きは、既に命おへを聞けり。敢えて問う、民みちを道みちき徳を興すは如何せん」孔子曰く「之を申べ、……之を服し、緩やかに施して之を遜力す。唯だ孝徳有りて、其……」（17）【11】【13】  
……上下相報ゆるに忠を以てすれば、則ち民は歎びて教を承け、□を害する者は不……（22）

このように民の統治・教化という主題は『論語』に対応部分のみならず、『中弓』全体における中心的な主題の一つであったと考えられる。

上述のごとく、『中弓』はすべてが残簡であるため、竹簡綴合や排列およびそれにかかる釈読の問題が研究の中心的位置を占め、これまでに多くの綴合・排列案が提出されている。ただし其中には、綴合復原した簡長が、他の整簡から推定されている簡長を十cm以上も超過して到底成立し得ないものや、上述した呼称や用字の面から首肯し難いものなど、未だ臆測の域を出ない例も散見さ

れる。したがつて今後は、提出された見解の妥当性を慎重に吟味した釈文の校定作業が必要になるであろう。

### (3) 主要釈文・注釈・研究

- ①陳劍「上博竹書《仲弓》篇新編釈文(稿)」(「簡帛研究」網站、一〇〇四年四月十八日)
- ②李銳「《仲弓》新編」(「孔子2000」網站、一〇〇四年四月二十一日)
- ③福田哲之「上博楚簡『中弓』における説話の変容—『論語』子路篇『仲弓』爲季氏宰章との比較を中心に—」(『中国研究集刊』第三十六号、二〇〇四年十二月)
- ④廖名春「楚簡《仲弓》与《論語・子路》仲弓章読記」(『淮陰師範学院学報』一〇〇五年第一期)
- ⑤晁福林「上博簡《仲弓》疏証」(『孔子研究』一〇〇五年第二期)
- ⑥趙炳清「上博簡三《仲弓》的編聯及講釈」(「簡帛研究」網站、一〇〇五四年四月十日)
- ⑦陳偉「竹書《仲弓》詞句試解(三則)」(「簡帛研究」網站、二〇〇五年八月十五日)

(福田哲之)

## 『恒先』(こうせん)

### (1) 書誌情報

竹簡全十三簡で、第五簡と第十三簡の下端に若干の残欠があるが、文字には全く欠損がないと考えられる。竹簡の長さは約三十九・四cm前後で、編綫は三道、文字数は五百十字である。第三簡の背に「恒先」と篇題が記される。訳文は李零氏が担当している。竹簡の排列に関してさまざまな組み替え案が提出されているが、李零氏の排列が妥当性を持つことは、ほぼ承認して良いと考えられる。

### (2) 内容と研究概況

『恒先』には、独自の宇宙生成論が記される。宇宙の始原とされているのは「恒」である。第一簡の冒頭には「恒先」と記されるが、「恒」が宇宙の始原そのものを表す語で、「先」は「恒」の時期を表す語である。そこで「恒先」は、「恒」という始原の段階の時期との意味である。

『恒先』の作者は、「恒先無」と、「恒」なる原初の時期には、世界は無だったのだが、質と静と虚の三者だけは、最初から存在していたと語る。最初は微小だった質・静・虚の三者は、やがて膨張し始める。大質・大靜・大

虛へと増長した三者は、無の中に封じ込められたままの現状に不満を抱き、「恒」からの脱出を図る。その結果として、「恒」の時期には存在しなかつた「或」なる時期が発生したとされる。原初の世界である「恒」と、後発の世界である「或」を設定し、「恒」と「或」二つの時期、二つの世界の対比で、宇宙の生成や世界の基本構造を説明するところに、『恒先』の最大の特色がある。

『恒先』の作者は、「有或焉有氣。有氣焉有有」と、「或」の段階に入つてから気が発生したと述べる。その説明によれば、「氣是自生」「氣是自生自作」と、気は何者かを母として生じたのではなく、自分で生じ、自分で動き回るようになつたのだという。したがつて、「恒莫生氣」「恒氣之生、不獨有與也」と、「恒」は気の発生に何ら関与していないとされる。

静虚から生じてきた直後の気は、「爲一若寂、夢夢靜同」と、まだ混沌たる状態で分化していかつたとされる。「或」と氣は表裏一体の関係にあるので、「未或明、未或滋生」と、「或」もまた混沌・未分化の状態にあつたと語られる。

続いて『恒先』は、「或」の世界に万物が生じてきた状況を記述する。「或」そのものが「恒」に自得できずに「恒」から離脱してきた以上、「或」の世界に生ずる者たちも、

同様の行動を取る。そこで「昏昏不寧、求其所生」との發生動機も、「自厭不自忍、或作」とする「或」の發生動機と同じ性格を示す。このように、現状に対する不満・鬱屈を万物發生の動機とする点は、『恆先』の特色として興味深い。

『恆先』は宇宙生成論を述べた後に、人類の誕生を問題にし、人類發生以前には世界には善や治だけがあつて、混乱などは存在しなかつたと言う。このように『恆先』の作者は、人類の存在を明確に悪と規定する。

『恆先』と『老子』と『太一生水』の間には、多くの共通性が見られる。第一は、その思想が宇宙の始原から説き起こして、現今の人間社会の在り方を批判するという、宇宙生成論と文明批判を接合した構造を備える点である。第二は、『恆先』も『老子』も、宇宙の始原を「無」と規定する点である。『太一生水』は宇宙の始原を「無」と明言はしないが、「太一」のみが存在した原初の段階では、天地・万物が存在しなかつたのであるから、実質的には宇宙の始原は「無」だつたと主張していることになろう。

第三は、『恆先』の「恒」、『太一生水』の「太一」、『老子』の「道」の三者が、極めて良く似た性格を示す点である。これら三者は、いずれも宇宙の始原であると同時に

に、万物發生後の現今の世界をも背後で統括する、宇宙の主宰者とされている。したがつて三者は、宇宙の絶対神とも称すべき存在なのであるが、それにもかかわらず、上天・上帝が持つ人格神的要素は極力稀薄化されている。この点で三者は共通した性格を示すのである。

第四は、『恆先』『太一生水』『老子』の三者が、それぞれ「恒」「太一」「道」といった宇宙の主宰者を立てながら、「天道」を理法化する天道思想を、自己の体系の中に肯定的に組み込んでいる点である。第五は、『恆先』『太一生水』『老子』とともに、強大・満盈を獲得しようとする人間の作為を強く批判する点である。第六は、『恆先』と『老子』が、ともに万物への命名を論ずる認識論的視点を持つ点である。

『恆先』『太一生水』『老子』の三者は、それぞれ「恒」「太一」「道」を宇宙の主宰者とする、独自の宇宙生成論を提出している。そしてこの三者の間には、先行するいづれかの影響を受けて、他の二つがその亜流として形成されたといった、顕著な影響関係は見出だせない。

これまで我々が利用できた先秦の道家思想の文献は、ほとんど『老子』と『莊子』に限られていた。そのため、『老子』が道家思想の始祖と目され、多くの場合、道家思想はすべて『老子』を始原として展開し発展してきた

と考えられてきた。だが相次ぐ戦国楚簡の発見によって、『恆先』『太一生水』『老子』の三者が、それぞれ独自の宇宙生成論を掲げて戦国前期に並立していた状況が浮かび上がってきたのである。

### 『彭祖』(ほうそ)

#### (3) 主要叢文・注釈・研究

- ① 浅野裕一「上博楚簡『恆先』の道家特色」(『戦国楚簡研究』萬巻樓・二〇〇四年十一月)
- ② 浅野裕一「上博楚簡『恆先』の道家の特色」(『早稲田大学長江流域文化研究所年報』第三号・二〇〇五年)
- ③ 李学勤「楚簡『恆先』首章叢義」(『中国哲学史』二〇〇四年〇三期)
- ④ 蓦名春「上博藏楚竹書『恆先』新叢」(『中国哲学史』二〇〇四年〇三期)
- ⑤ 李銳「“氣是自生”..『恆先』独特的宇宙論」(『中国哲学史』二〇〇四年〇三期)
- ⑥ 丁四新「有无之辯和氣的思想—楚簡『恆先』首章哲学叢義」(『中国哲学史』二〇〇四年〇三期)
- ⑦ 郭齊勇「『恆先』—道法家形名思想的佚篇」(『江漢論叢』二〇〇四年〇八期)
- ⑧ 隣万耕「楚竹書『恆先』簡説」(『齊魯學刊』二〇〇五年〇一期)

#### (2) 内容と研究概況

本資料は、他の楚簡の多くが儒家系文献であると推定

⑨ 劉貽群「『恆先』三題」(『文史哲』二〇〇五年〇一期)

(浅野裕一)

(1) 書誌情報  
竹簡全八枚。ほぼ完簡と認められるのは三枚で、簡長は約五十三センチ。他五簡は残簡。簡端は平齊で、三道編綫。総字数は二九一字。篇題はなく、「彭祖」とは内容から命名した仮称である。

竹簡の配列については、第一簡が内容から判断して全体の冒頭部分であると推測され、また、第八簡の文末に墨鉤があり以下留白となっていることから、第八簡が全体の末尾であることは明らかである。竹簡の接続について『上海博物館藏戦国楚竹書(三)』の叢文(李零氏担当)は、第一簡と第二簡、第七簡と第八簡とを連続するものとして解釈しているが、他の四簡については前後の接続不明であるとしている。つまり、第三簡から第六簡まではあくまで仮に配置されたものである。

されているのに対し、伝世の道家系文献や道教伝承の中に登場する「彭祖」が話者となつていて点に大きな特色を有する。

これまで、彭祖については、帝顓頊の曾孫または玄孫で、七百歳あるいは八百歳の長寿を保つた人物とするのが通説であり、また彭祖伝承の展開については、もともと国名または部族名であったものが個人名へと変化し、さらに後世、不老長生伝承が付加されたという点で、およその共通理解がなされてきた。ただ、国名から人物名への変化がなぜ生じたのか、また長生者あるいは神仙であるとの伝説がどのようにして付加されたのか、などは大きな謎とされてきた。

これに対して、上博楚簡『彭祖』においては、「君」たる彭祖と「臣」たる耆老とが君臣問答を展開している。しかも、その会話の内容は、天・地・人のあり方、特に後半では人倫・人道の重要性であり、彭祖が人物として設定されていることは確実である。そして、個人の不老長生や房中養生などの要素は皆無である。

すなわち『彭祖』は、国名から個人名へという彭祖伝承の展開の上で、極めて興味深い位置にあると言えるのである。「彭祖」自身は明らかに「君」という個人として捉えられる一方、そこで説かれているのは国家の長生だ

からである。それはまさに、国名から個人名へという彭祖伝承の転換点にあると推測される。

また、彭祖は後世、「老彭」「彭老」のように老子と連称され、彭祖が老子に匹敵するほどの「道」の体得者として重視されたり、両者が混同されるといった現象も見られるようになる。これは、彭祖が驚異的な長生を保つたとされたり、神仙家・房中家と捉えられていったことと関係するであろう。ただ、上博楚簡『彭祖』には、「慎終」を説き、ことさらな作為を否定し、素朴な心身のあり方を重視し、ものごとの「長久」を願うなど、『老子』の思想との関連性が高い。このことも、後に彭祖が老子と連称または混同されていく一つの要因になつたと推測される。

なお、本文献の詳細については、下記の主要研究の①を御参照いただきたい。

### (3) 主要釈文・注釈・研究

①湯浅邦弘「上博楚簡『彭祖』における「長生」の思想」  
『中国研究集刊』第三十七号、二〇〇五年六月)

②李銳「『彭祖』補釈」(『簡帛研究』網站、二〇〇四年四月十九日)

③趙炳清「上博簡三《彭祖》補釈」(『簡帛研究』網站、

一〇〇五年一月二十六日)

④孟蓬生「《彭祖》字義疏證」(「簡帛研究」網站、一〇

〇五年六月二十一日)

(湯浅邦弘)

### 『采風曲目』(さいふうきょくもく)

#### (1) 書誌情報

『采風曲目』は古代中国において用いられた宮・商・角・徵・羽(現在の異同調のド・レ・ミ・ソ・ラにあたる)の五音階のうちの宮・商・徵・羽の四音階の音名と

それぞれに属する歌謡の曲目によって構成される。篇題

はみられず、「采風曲目」という書名は内容にもとづく仮称である。残存竹簡は六箇で、いずれも残缺している。

『上海博物館藏戰國楚竹書(四)』の釈文(馬承源氏担当)にもとづき、竹簡の残存状況を記すと以下のとくであ

る。

なお『上海博物館藏戰國楚竹書(四)』(三頁)の図版によれば、最長の簡は第五簡であるのに対し、釈文に示された簡長では第三簡が最長となす、図版との間に齟齬を生じている。おそらく第三簡の簡長の記載に誤りがあ

るのではないかと思われるが、ここでは取り敢えず釈文の数値をそのまま提示した。

【第一簡】上端は残缺、下端は平齊完存、長さ四十六・

六cm、現存三十五字

【第二簡】上段と下段とを接続。上段は上下とも残缺、長さ二十三・七cm、現存十七字下段は上が残缺、下端は平齊完存。長さは二十二・八cm。

現存十五字。上下段を合計すると長さ四十六・五cm、三十二字(完存三十一字)

【第三簡】上端は残缺、下端は平齊完存、長さ五十六・一cm、現存三十六字

【第四簡】上端は残缺、下端は平齊完存、長さ四十六・五cm、現存三十四字(完存三十三字)

【第五簡】上端は残缺、下端は平齊完存。長さ五十四・五cm、現存十字

【第六簡】上端は残缺、下端は平齊完存。長さ四十六・五cm、現存五字

原則として曲目の後に短横の符号が付されており、第一簡は宮、第二簡は商、第三簡は徵、第四簡は羽の音階の音名とそれに属する曲目が記され、第五簡・第六簡は曲目のみで、その後が文字のない留白となつていて。こ

うした状況から『采風曲目』は、音階ごとにそれぞれの音名とそれに属する曲目が簡によって区分され、第五簡・第六簡はいずれかの音階の音名に属する曲目の末簡と推定される。

## (2) 内容と研究概況

『采風曲目』の釈読については、董珊(北京大学考古文博学院)「読《上博藏戰國楚竹書(四)》雜記」《采風曲目》(『簡帛研究』網站、二〇〇五年二月一十日)によつて、重要な修正案が提出されているので、その概要を以下に紹介してみたい。

まず、第一簡にみえる「又談」「又文又談」、第二簡にみえる「又談」について、董氏は、これらの共通する用語はいずれも曲目の後に付されており、馬氏の釈文のごとく曲目あるいはその一部とは見なしがたいことを指摘し、『礼記』樂記、『楚辭』大招、『文選』馬融「長笛賦」の李善注などの検討から、これらは曲目の演奏に關する指示語であり、「又文」は「鼓樂節奏」を指し、「(有)文」とは鼓樂伴奏付き、「又談」の「談」は「衆人和声」を指し、「又(有)談」とは合唱付きを意味すると推測している。

つぎに董氏は、「宮穆」「訏商」「徵和」「羽謨」の「」と

く、宮・商・徵・羽の四つの音階の前後に付された綴詞の意味について個別に検討を加え、曾侯乙編鐘銘に表示された音階の前後綴詞との関連や『淮南子』天文訓の記述などによつて、音名の解釈を試みている。その考証は、いずれも首肯すべき点が多く参考に値するが、第一簡の「宮祝《君壽》」の「祝」を「祝」と釈して《祝君壽》を曲名とし、その前に付された音階「宮」を「無後綴」と解する点については、確認し得る他の音名はすべて音階の前か後に綴詞があり、しかも宮の場合にはすべて後綴詞であること、「祝」を「祝」と釈する点についてなお検討の余地が残されること、《君壽》を曲名と解してとくに問題は生じないことなど、董氏の見解にはいくつかの疑点が指摘され、むしろ「宮祝」を音名と解する馬氏の釈文に一定の妥当性を認め得るようである。

董氏はさらに五つの曲目について、釈読の補足・修正を加えており、例えば第四簡「鶡羽之白也」を音名・曲目と解して「鶡羽《之白也》」とする馬氏の釈文に対し、すべてを曲目と解して《鶡(鷺)羽之白也》に修正する見解など、いずれも従うべき点が多い。

馬承源氏の釈文をもとに董珊氏の見解を踏まえて補訂を加え、各簡にみられる音名(音階・前後綴詞)・曲目を一覧表にまとめると以下のとくである。

竹簡	音名		曲目
	音階	前後綴詞	
第一簡	宮	不明	《子奴思我》
		穆(後綴)	《碩人》又文又譏
		巷(後綴)	《喪之末》
		訐(後綴)	《疋空月》《埶又策》《出門召東》
		𢂔?(後綴)	《君壽》
第二簡	商	不明	《猶壳(嫩)人》《母過吾門》《不寅之姪》
		𠂇(前綴)	《要丘》又譏《奚言不從》《豊又酉(酒)》
		趨(前綴)	《高木》
		訐(前綴)	《唯口》
第三簡	徵	訐(前綴)	《牧人》《募人》《蠶亡》《鬻氏》《城上生之葦》 《道之遠尔》《良人亡不宜也》《奈也遺玦》
		和(後綴)	《驛剗之賓》
第四簡	羽	不明	《元儻也》《鵠(鷺)羽之白也》
		趨(前綴)	《子之賤奴》
		訐(前綴)	《北埶人》《尊虎》《咎比》《王音深浴(谷)》
		𢂔(後綴)	《嘉賓迺惠》
第五簡	郎?	不明	《口居》《思之》《茲信然》
		𢂔(後綴)	《弋虎》
第六簡	不明	不明	《苟吾君母死》

『采風曲目』の残簡中に五音のうちの角が見いだされない点について、馬承源氏は、角にかかる残簡は早い時期に散佚したのではないかと推測し、それとの関連から、残簡には裏の竹青面に別種の著作の内容を記したものがあり、本篇はもともと完全な形のものではなく、楚の宫廷における正式な保存文書ではなかつた可能性を指摘している。一方、董珊氏は『采風曲目』に宮・商・徵・羽の四音が残存する点と曾侯乙編鐘銘辞が角以外の宮・商・徵・羽を「四基」とする点との共通性を指摘しており、曾国が楚の文化圏に属することを踏まえれば、楚の音樂には宮・商・徵・羽を中心とする特有の音律が存在した可能性も考慮される。さらに、第五簡の音階名と見なされる「郎」について、董氏は特殊な音階名称と位置付け「存疑待考」とするが、この「郎」が楚における角の別名である可能性も考慮しておく必要があろう。

また馬承源氏は『采風曲目』と現存の『詩經』との関係について、曲目と篇名との合致は第一簡の「碩人」と『詩經』衛風・碩人との一例にとどまるが、「碩人」の語は他に衛風・考槃や邶風・簡兮にもみえ、さらに鄭風の「野有蔓草」の語と第一簡の曲目「埶又策」、周南の「樛木」の語と第二簡の曲目「高木」とに関連がみられることを指摘している。このように『詩經』との関連が認め

られる曲目が三曲にとどまり、しかもそのうちの二曲は文字に異同を有して、対応関係になお疑問の余地が残ることを踏まえれば、『采風曲目』の大部は『詩經』にみられない逸詩であった可能性が高いであろう。逸詩の存在は、すでに『左伝』や『國語』をはじめとする伝世文献によつて知られてゐたわけであるが、『采風曲目』は後述する『逸詩』二篇とともに、戦国期に多数の逸詩が存在したことと具体的に示す資料として重要な意義を有している。

(3) 主要釈文・注釈・研究

① 董珊「読《上博藏戰國楚竹書(四)》雜記」(『簡帛研究』網站、一〇〇五年二月二十日)

② 楊澤生「讀《上博四》札記」(『簡帛研究』網站、一〇〇五年三月六日)

### 【逸詩】(いっし)

#### (1) 書誌情報

『逸詩』は「交交鳴鶩」四簡と「多薪」二簡との二篇、計六簡の残簡からなる。いずれも竹簡中に篇名は見られ

ず、「交交鳴鶩」は詩章の首句により、「多薪」は詩章が不完全なため詩意による仮称である。

『上海博物館藏戰國楚竹書(四)』の釈文(馬承源氏担当)にもとづき、各篇の書誌情報を記すと以下のとくである。

#### ① 「交交鳴鶩」

【第一簡】上・下端ともに残缺、長さ二十四・七cm、現存二十一字

【第二簡】上端は残缺、下端は平齊完存、長さ二十三・一cm、現存二十二字(重文一を含む)

【第三簡】上端は残缺、下端は平齊完存、長さ二十七cm、現存二十五字(重文一を含む)

【第四簡】上端は残缺、下端は平齊完存、長さ二十五・八cm、現存二十六字(残缺字一を含む)

符号は、第二簡・第三簡・第四簡にそれぞれ一つ、計三つ認められ、いずれも章の末尾に位置する。ただし、第二簡と第三簡の二つは小点であるのに對し、第四簡は逆三角形の「▼」の「」とき形体であることから、最初の二つは章末、最後の一つは篇末を示す符号と見なされる。

#### ② 「多薪」

【第一簡】上端は残缺、下端はほぼ完存、長さ二十一・三

cm、現存二十三字(重文四を含む)

【第二簡】上端は残缺、下端は平齊完存、長さ二十三cm、

現存二十一字(重文四を含む)  
符号は、第二簡に二つ認められる。一つは「莫如松梓」句末の短横符号、他の一つは本文末尾に付された「レ」のごとき形体の符号である。

釈文は「莫如松梓」句末の符号を句読符号として表示するが、「多薪」の残存十二句のうち「莫如松梓」句と篇末句とを除く十句に符号ではなく、「莫如松梓」句のみに句読符号が付された理由を見いだしがたい。「莫如松梓」句末の符号を観察すると、符号の位置は「莫如松梓」の「梓」字の後というよりも、むしろそれに続く次句「多一人」(多  
人多人)の「多」字の上に近接して付されており、しかも「多」の右下に付された重文符号の点画と酷似している。こうした状況を踏まえれば、「莫如松梓」句末の符号は句読符号ではなく、重文符号の第一画の誤写である可能性が高いであろう。

一方、「レ」の符号はその後が文字のない留白となつており、疊詠形式による詩章の構成や詩意の面からも、レが篇末を示す符号であることは疑いない。

## (2) 内容と研究概況

### ① 「交交鳴鶯」

「交交鳴鶯」は疊詠形式であることから、殘簡の相互比較によつて、三章が復原される。馬氏の釈文にもとづき諸家の見解を参考に作成した復原本文・訓讀文を以下に掲げる。なお、釈文は便宜上、可能な限り通行の文字を用い、重文も通常の表記に改めた。また、章の番号はあくまで便宜的なものであり、全体の章数は不明である。本文中の漢数字は竹簡番号、「」は補釈字、□は不明字、▲は押韻字を示す。

### 〔復原本文〕

1 「交交鳴鶯 集于中」梁  
憮悌君子 若玉若英  
君子相好 以自爲長  
愷豫是好「唯心是□  
間關憲司 皆華皆英▲

### 2 交交鳴鶯 集于中渚

憮悌君子 若豹若虎

君子ニ「相好 以自爲□」

愷豫是好 唯心是與▲

間關憲司 皆上皆下

3 交交鳴鶩 集于中溝▲

愷<sup>三</sup>〔悌君子 若□<sup>四</sup>〕<sup>酉貝</sup>▲

君子相好 以自爲慧▲

愷豫是好 唯心是勵▲

閭闈母司 皆小皆大<sup>四</sup>▲

### 〔訓読文〕

1 交交と鳴く鶩 中梁に集まる

愷悌の君子 玉の若く英の若し

君子相い好し 以て自ら長と為す

愷豫是れ好し 唯だ心是れ□

閭闈たる母司 華と皆に英と皆に

2 交交と鳴く鶩 中渚に集まる

愷悌の君子 豹の若く虎の若し

君子相い好し 以て自ら□と為す

愷豫是れ好し 唯だ心是れ与<sup>モ</sup>にす

閭闈たる母司 上と皆に下と皆に

3 交交と鳴く鶩 中溝に集まる

愷悌の君子 □の若く貝の若し

君子相い好し 以て自ら慧と為す

愷豫是れ好し 唯だ心是れ勵ます  
間闊たる母司 小と皆に大と皆に

釈説については、現在「簡帛研究」網站を中心に多くの見解が提出されているところであり、最終的にはそれらを総合して最も妥当な釈文を作成する必要がある。こ<sup>こ</sup>では取り敢えず、釈文中に□で示した三字の不明字にかかる廖名春氏・季旭昇氏の見解を紹介しておこう。

不明三字のうち、まず押韻字である第一章・第八句末字と第二章・第六句末字の二字を取り上げる。「交交鳴鶩」の押韻は、第一章陽部、第二章魚部、第三章月部の隔句韻となっている。したがって、第一章「唯心是□」および第二章「以自爲□」の缺字は、それぞれ陽部押韻字、魚部押韻字に限定され、句意との関係から候補は一定の範囲に絞られる。廖名春氏・季旭昇氏の推定はそれぞれ以下の二とくである。

第一章・第八句 「唯心是□」 ……廖名春「向」・季旭昇「匡」

第二章・第六句 「以自爲□」 ……廖名春「雅」・季旭昇「禦」

次に第三章・第四句「若□<sup>四</sup>〔酉貝〕」の不明字を取り上げ

る。「貝」の前の残缺字が「若」であることは他章との比較から推定され、残缺字の形体もそれを裏付けている。したがつて、不明字は第一章・第四句「若玉若英」、第二章・第四句「若豹若虎」との関連と「貝」との共通性から、宝貨をいう語であったと見なされる。廖名春氏・季旭昇氏の推定は以下の二とくである。

第三章・第四句 「若□𦥑貝」 ……廖名春「珠」・季旭昇「金」

この他にも各章第九句の「母司」の解釈など、なお釈讀に見解の一一致をみない点があり、今後に残された課題も少なくない。しかし、「交交と鳴く鳩」との興によつて詠いおこし、「玉」「英」や「豹」「虎」などの比喩を用いて「君子」の品性や威儀を称えたこの詩が、『詩經』三百篇に匹敵するすぐれた表現をもつ点については、ほぼ共通の理解を得ることができよう。

## ② 「多薪」

「多薪」は残存簡が二簡にとどまるため、詩章の構成について十分に把握し難いが、疊詠形式をもつ篇末の三章とその前に位置した別の形式をもつ章の末尾二句の復原が可能である。末尾の三章については、章ごとに第一

句と第三句、第二句と第四句の末字が押韻する交韻の状況が認められる。以下に復原本文を示す（釈文の表記等は「交交鳴鳩」と同様）。

〔復原本文〕

1 ……

兄及弟淇、鮮我二人

2 多薪多薪、莫如蘿葦。  
多人多人、莫如兄「弟」。

3 多薪多薪、莫如□□。  
多人多人、莫如同生。

4 多薪多薪、莫如松梓。  
多人多人、莫如同父母。

〔訓讀文〕

1 ……

兄と弟と、鮮すくなし我ら二人

2 薪多く薪多きも、蘿葦に如くは莫し  
人多く人多きも、兄弟に如くは莫し  
3 薪多く薪多きも、□□に如くは莫し

人多く人多きも、生を同じくするに如くは莫し

#### 4 薪多く薪多きも、松梓に如くは莫し

人多く人多きも、父母を同じくするに如くは莫し

第三章・第二句の末尾二字は缺失により不明であるが、第二章・第二句の「蘷葦」が水辺のアシの類であり、第三章・第二句の「松梓」が樹木であることから、第三章・第二句はその中間に位置する植物であったと見なされる。

この点について廖名春氏は、『管子』地員篇にみえる十二種の植物の植生にかかる記述を根拠に「蕭萍」を補入し、句末の「萍」字が第四句末の「生」字と同じく耕部に属することから、押韻面においてもその妥当性が裏付けられるとする。

また廖氏は、「墨子以長松・文梓為楚地標志性的良木、更是這種尊崇松梓觀念的反映」と述べて、第四章・第二句の「松梓」と楚との関連を指摘し、「多薪」が楚で作成された可能性を示唆している。

廖氏が指摘する『墨子』の語は公輸篇に「荆の地、方五千里、宋の地、方五百里。此れ猶お文軒の敝轂に与けるがごときなり。……荆に長松・文梓・楩栢・豫章あり、宋に長木無し、此れ猶お錦繡の短褐に与けるがごときなり」とみえ、楚王に会見した墨子が、強大で資源にも恵

まれた楚が、弱小で資源に乏しい宋を攻めることは、盜賊にも似た愚行であることを説くために、「宋に長木無し」との対比から楚にある大木を列挙した部分にあたる。したがつて楚に「松梓」が存在したことは確かであるが、「長松」「文梓」はあくまでも高木のない宋との対比から「楩栢」「豫章」などとともに例示されたものであり、廖氏のごとく「松梓」を「楚地標志性的良木」と見なし得るかについては、なお慎重な検討が必要であろう。

「多薪」は缺失により、内容を十分に把握し難く、興としての「薪」の機能や上述した「蘷葦」「松梓」との関係など、詩句の解釈についてなお多くの問題が残されている。また主題については、あくまでも残存部から推測にすぎないが、兄弟のきづなのかげがえのなさを歌う詩と推測され、わざかに兄弟二人の身内となつた兄が弟を戒める主題をもつ『詩經』鄭風、揚之水などとの関連も考慮される。

#### (3) 主要釈文・注釈・研究

①廖名春「楚簡《逸詩・交交鳴鳥》補釈」(「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月十二日)

②廖名春「楚簡《逸詩・多薪》補釈」(「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月十二日)

③季旭昇「《上博四・逸詩・交交鳴鳥》補釈」（「簡帛研究」網站、二〇〇五年一月十五日）

④李銳「《讀上博四札記（一）》（「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月二十日）

○五年二月二十日

⑤董珊「《讀《上博藏戰國楚竹書（四）》雜記》（「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月二十日）

⑥楊澤生「《讀《上博四》札記》（「簡帛研究」網站、二〇〇五年三月六日）

（福田哲之）

### 『昭王毀室・昭王與葬之辨』

（しょうおうおうきしつ・しょうおうおうときようしどんと）

#### （1）書誌情報

竹簡全十枚。完簡六枚、残簡四枚。簡長は完簡の場合四三・三・四四・一二。竹簡の上下端は平齊で三道編縫。右契口。

第五簡途中に墨節があり、明らかに二つに分節されている。そこまでの前半部が『昭王毀室』そこから後が『昭王與葬之辨』。名称はともに内容に基づく仮称である。第十簡末尾に墨鉤があり、以下留白となっている。字数は、『昭王毀室』一九六、『昭王與葬之辨』一九二、の計三八

八字。釈文の担当は陳佩芬氏であるが、竹簡の断裂や難解な箇所があり、「待考」とされている部分も多い。

#### （2）内容と研究概況

楚の昭王（前五一五～前四八九）に関する一つの説話から成る。前半の『昭王毀室』は、すでに亡くなった父の墓にこのたび亡くなつた母を合葬（合骨）したいと願う「君子」が登場し、楚の昭王に直訴するという内容である。父母の合葬といえば、孔子の事例が思い起こされる。孔子は母が亡くなつた際、その亡骸を父の墓のある防の地に合葬したという。また同様の合葬にまつわる話が『礼記』や『晏子春秋』にも見える。父母の墓は同一墓地内にあるべしとの意識が前提としてあることは明らかである。

ただ、ここに登場する「君子」の合葬に対する意識、および君子に面会した「昭王」の対応には、他の資料には見られない特色がある。それは、君子の願いが極めて率直であり、昭王もまた寛大にそれを受け入れている点である。君子は、楚王の築いた宮室がたまたま彼の父を埋葬した墓地の上にあつたことから、喪服に身を包んで昭王に面会しようとする。門番や奏上の取り次ぎ役は制止するが、君子は是非とも面会したいと力説し、ついに昭王への直訴がかなう。

一方、昭王は、そのことを知らずに宮室を立ててしまつたことに対して、直ちにその非を悟り「毀室」を命ずる。「毀室」とは、君子の願いを聞き入れた昭王が、墓地の上に築いてしまつた宮室を毀したという結末を意味している。ここには死者に対する昭王の敬意が読み取れると言えよう。

また、父母の合葬を取り上げながら、そこに「孝」や「仁義」といった儒教的徳目が介在しない点も大きな特色である。同様に合葬の説話を掲載する『晏子春秋』では、合葬の願いを聞き入れない斉の景公に対して、晏嬰が「仁」や「義」といった倫理的観点から説得を試み、景公がそれを渋々聞き入れるという内容になつていて、本文献とは性格が大きく異なつている。『晏子春秋』では、言うまでもなく晏嬰の知性や活躍が主題となつていてのに対し、本文献では、聞き分けの良い昭王に焦点が当たられていて、ここから「孝」や「仁」「義」といった思想的要素を読み取ることはできない。

次に、後半の『昭王與襲之脾』は竹簡の断裂もあつて、文意を読み取りづらいが、やはり楚の昭王と襲之脾という人物にまつわる説話である。『襲之脾』（きょうしどん）の「脾」字は「臍」（すい）であるという異説も提出されているが、いずれにしても、昭王の御者として登場す

る人の名であり、かつて楚が吳に侵攻された際、功績があつた臣下の子であるとの設定になつてゐる。昭王はこの襲之脾の態度について深謀遠慮から戒めた、というのがおおよその粗筋であると思われる。

なお、この二つの説話には、「ト令尹」「視日」「至甬」「大尹」など、楚の官名・役職名と思われる特殊な用語が登場する。また、僅かの話の中に比較的多くの人物が登場し、場面転換も多用されていて、後世の通俗小説や語り物のスタイルを髣髴とさせる。さらに、『昭王與襲之脾』には、「天、禍を楚邦に加え、霸君吳王、郢に廷至し、楚邦の良臣骨を暴す所となる」と、吳楚両国の敵対関係を説く箇所も見られる。

これらのことから、本文献は、「孝」「仁」「義」などの倫理的要素を宣揚するために広く世界に向けて発信された思想的文献というのではなく、楚の王、太子あるいは貴族などを主な読者対象として編纂された楚の在地性の文献ではないかと推測される。

### (3) 主要釈文・注釈・研究

- ①董珊「讀《上博藏戰國楚竹書（四）》雜記」（『簡帛研究』網站、二〇〇五年一月二十日）  
②陳劍「上博竹書《昭王與襲之臍》和《柬大王泊旱》讀

後記」（「簡帛研究」網站、二〇〇五年一月十五日）

③孟蓬生「上博竹書（四）問詁」（「簡帛研究」網站、二〇〇五年三月六日）

④陳偉「關於楚簡「祝日」的新推測」（「簡帛研究」網站、二〇〇五年三月六日）

⑤魏宜輝「說上博楚簡（四）箚記」（「簡帛研究」網站、二〇〇五年三月十日）  
⑥侯乃鋒「《昭王與龔之雁》第九簡補說」（二〇〇五年三月二十日）

（1）書誌情報

竹簡全二十三枚。竹簡はほぼ完簡。総字数は六〇一字で、そのうち合文が三、重文が五。竹簡の形状は、簡端が平齊、簡長が約二十四センチ、簡幅が〇・六センチ、簡厚が〇・一二センチ。兩道編綫。編綫部の切れ込みである契口の位置は各簡の右側にあり、上端から上契口までが七・五センチ、契口間が九センチ、下契口から下端までが七・五センチとなっている。竹簡の文字は、各簡の上端から下端まで書かれており、留白部分がない。字数は二十四～二十七である。墨釘が四個（第八・十六・二十一・二十二簡）確認されている。篇題はなく、「東大王泊旱」とは第一簡の第一句から命名した仮称だが、全文の内容にも対応している。

（2）内容と研究概況  
⑩范常喜「讀《上博四》札記四則」（「簡帛研究」網站、二〇〇五年三月三十一日）

⑪范常喜「《上博（四）・昭王與龔之雁》簡八補釘」（「簡帛研究」網站、二〇〇五年五月九日）

⑫李佳興「《昭王毀室》中的埃及（簡三）」（「簡帛研究」網站、二〇〇五年五月十八日）

（湯淺邦弘）

本編は、「東大王泊旱」と名付けられたとおり、東大王が自國の旱魃をとどめようとして行った卜筮に関する記述から始まる。まず問題となるのは、この「東大王」が歴史記録上で確認しうる、どの王に該当するのかということである。『上海博物館藏戰國楚竹書』整理者の「説明」

では、この「東大王」という呼称が『江陵望山沙塚楚墓竹簡』(望山楚簡)にも見られ、望山楚簡の釈読で、楚の簡王と目されていることを指摘している。楚の簡王は、『史記』などの記述からの推定では、在位期が前四三一～前四〇八年の楚国第十七代目の王と考えられている。ちなみに、「東」と「簡」は上声濁韻で通じる。

ここで、『東大王泊旱』の内容を、濮芋左氏の釈読に沿つて紹介しておこう。話は、王が郢の近くの大夏という地で楚を襲った大干魃が止むように雨乞いの祭祀を行わんとするところから始まる。ところが、祭祀を始めようとしたとたん、王はにわかに重病にかかる。そこで王の病態を占うと、王の病気の原因は楚の祭祀対象になつてない名山・名渓の祟りであることがわかる。この時点では、王は雨乞いの祭祀に先立つて、自らの病の原因を除去すべく、名山・名渓への祭祀を行おうとする。しかし、臣下から「楚邦に常有り。故に楚邦の鬼神の主の為にすらも、敢えて君主の身を以てせず」と、楚国には常法があり、君主の身の安全を国家の大事よりも優先してはならず、それに背くと上帝や鬼神から罰が下るという諫言が出る。王はそれでも名山・名渓への祭祀を優先しようとするが、その祭祀がうまくいかない夢を見る。そこで新たに「太宰晉侯」なる人物に対応策を図ると、太宰は、

上帝は国家をきちんと統治できない君主に旱魃を起こして天罰を下すのであるから、まずは郢をきちんと治めなくてはならないと提案する。王がそのとおりに郢を治めると、雨が降つて旱魃が解消し、四方の辺境まで穀物がよく実つたという。

『東大王泊旱』は、以上のように旱魃防止の占いが話題の中心ではあるが、細かく見れば、国家統治と旱魃の関係に関する議論と、国家の大事と王の身の大事のどちらを優先すべきかという議論の、二つの論点を持つている。まず、国家統治と旱魃の関係という論点においては、上帝が為政者への刑罰として旱魃を下すという典型的な天人相関思想に基づく、「太宰」と東大王との対話が記録されている。「天人之分」を説いた荀子の前に存在した戰国期の天人相関思想の一端を示す資料として、その視点からの詳細な検討が必要であろうと思われる。

一方、それとは別に、国家と王のどちらを優先するのかという論点もある。王の身の安全よりも旱魃への対処を優先すべきだという考え方がある。楚の常法だったとされる。國家の主権者は王その人であるとする絶対君主制の立場からすれば、当然ながら王の身を優先するのだろうが、『東大王泊旱』では、この点に関する議論が行われている。明確な結論は導き出されてはいないが、どちらか

といえば、王個人の身よりも国家を優先すべきだという考え方が優勢のようである。その点では、この『東大王泊旱』には、おそらく韓非子の主張と始皇帝の出現によって確立した絶対君主という存在にいたる、過渡期的な国家観・君主観・統治観の有様を見ることができ、中国古代政治思想史の再検討に当たって、有意義な資料と考えられる。なお前述の「説明」では、この『東大王泊旱』の内容について、戦国期における「軍事」「官制」「気象」「医学」「宗教」に関する記述を指摘している。

この『東大王泊旱』に関する論考として、筆者が確認しているものは、(3) に示すように、簡帛研究網站に見られるものだけである。それらは個別の語句や字義に関する札記のようなものであるが、③陳斯鵬「《東大王泊旱》編聯補議」は、整理小組が示した竹簡の順序に内容を吟味した上で異論を唱えており、もともとの竹簡番号で示せば、1・2・8・3・7・17・19・21・6・22・23・18・9・10・11・12・14・13・15・16という順序で考えるべきであるとしている。たしかに管見したところ、第8簡が、第2簡と第3簡の間に入るの妥当だと考えられ、今後の『東大王泊旱』に対する研究では、竹簡の並び替えに関する複数の試論が出てくるのではないかと考えられる。

(3) 主要釈文・注釈・研究

- ①季旭昇「《上博四・東大王泊旱》三題」(「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月十二日)

- ②陳劍「上博竹書《昭王與喪之雁》和《東大王泊旱》後記」(「簡帛研究」網站、二〇〇五年一月十五日)

- ③陳斯鵬「《東大王泊旱》編聯補議」(「簡帛研究」網站、二〇〇五年三月十日)

- ④劉信芳「竹書《東大王泊旱》試解五則」(「簡帛研究」網站、二〇〇五年三月十四日)

- ⑤工藤元男「楚文化圏のト筮祭祷簡習俗——上海楚簡東大王泊旱を中心に——」(21世紀CCE関連国際シンポジウム楚文化圏の現在Ⅱ、二〇〇五年九月二十六日)

(菅本大二)

### 『内豊(礼)』(ないれい)

#### (1) 書誌情報

書名は、第一簡の背面に本文とは逆向きにかかれた篇題「内豊」による。「豊」は「禮(礼)」の初文である。『上海博物館藏戰國楚竹書(四)』は原表記に従い「内豊」とするが、本稿では便宜上「内礼」と表記する。『上海博物

館藏戦国楚竹書（四）の「釆文考証」（李朝遠氏担当）にもとづき、書誌にかかる概要を以下に記す。

現存簡は十簡。そのうち完全な簡は四簡で、全長四十・二cm。二つの断簡を綴合して復原される整簡が三簡、上半段を存する残簡は一簡、下半段を存する残簡は一簡、上・下段を存し中段に缺失のある簡が一簡ある。編線は上・中・下三編で、第一編線は先端から一・二・一・四cm、第三編線末端から〇・八・一・一cmにあり、第一編線と第二編線、第二編線と第三編線の間はいずれも二十一cmである。第一簡から第七簡までは接続することができ、全篇には句読符号が多見される。

なおこの十簡以外に、同一字体であるが文義が連続せず編線も整合しないため「附簡」とされた下半段のみの一簡がある。

## (2) 内容と研究概況

『内礼』は、内容・形式や伝存文献との対応などにより、七つの段落に分けられる。以下、①から⑦のそれぞれの段落について順に内容を紹介していく。なお、裏面の篇題や冒頭の書き出しなどから、第一簡が『内礼』篇全体の冒頭簡にあたることはほぼ確実と見なされる。また七つの段落のうち①から④までは連続するが、⑤⑥

⑦の順序や相互の関係は不明である。

### ① 君子之立孝、～反此亂也。【第一簡～第六簡】

①では冒頭に「君子の孝を立つるは、愛是れ用い、礼是れ貴ぶ」と孝における愛と礼との重要性を説き、それを受けて「故に人の君為る者は、人の君の其の臣を使う能わざる者を言ひて、与に人の臣の其の君に事う能わざる者を言はず。故に人の臣為る者は、人の臣の其の君に事う能わざる者を言ひて、与に人の君の其の臣を使う能わざる者を言はず」とく、君臣、父子、兄弟それぞれについての当為が同一構文によって記され、さらにそれを承けて「君と言ふときは、臣を使うを言う。臣と言うときは、君に事うるを言う」の「～」とく、君臣、父子、兄弟と会見する際の第三者の当為が記される。

なおこの段落は、内容・本文の両面にわたって『大戴礼記』曾子立孝篇の冒頭章段との間に密接な共通性が認められ、後半の「君と言うときは、臣を使うを言う。……」の部分は、『儀礼』士相見礼にも類似した表現がみられる。

### ② 君子事父母、～「亦」不成孝。【第六簡～第七簡】

②では冒頭に「君子の父母に事うるは、私の楽しみ無く、私の憂い無し。父母の楽しむ所は之を楽し

み、父母の憂う所は之を憂う」とあり、続いて父母への諫言について、諫言が受けいれられなければ、

自己を抑制して道に外れたことも当たり、たとえその結果が死をまねくとしても父母に従う、との絶対的な服従が説かれる。

なおこの段落は、内容・本文の両面にわたって『大戴礼記』曾子事父母篇の冒頭章段との間に密接な共通性が認められ、冒頭の「父母の楽しむ所は之を樂しみ、父母の憂う所は之を憂う」の部分は、『礼記』内則篇にも類似した表現がみられる。

③君子「曰」、孝子不食、若在腹中巧變、故父母安之、如從己起。【第七簡／第八簡】

③では、孝子はたとえ食べずに空腹であつても、満腹のようにうまく見せかけ、父母が安心すれば、自分の心底からそうであるかのよう思うことが説かれており、父母につかえる上で私を否定する②の冒頭の主題と共通する。ただし、構成面からみると、③以後には「君子曰」を冒頭にもつ共通形式が認められ、独立した内容をもつことから③は②の主題をうけた章段として位置付けられる。

なおこの段落は、『大戴礼記』曾子事父母篇の冒頭章段の末部にみえる文言「孝子唯巧變。故父母安之」

との間に密接な関係が認められる。

④君子曰、孝子父母有疾、君子以成其孝。【第八簡】

④では、父母が病にかかつた際の「冠は力めず、行は頌らず、依に立たず、庶語せず」などの孝子のとるべきう行為や祈禱の方法などが具体的に記されている。

なおこの段落は、『礼記』曲礼上「父母疾有れば、冠者は櫛らず。行くに翔せず。言惰らず。琴瑟御せず。肉を食うも味わいを変するに至らず。酒を飲むも貌を変ずるに至らず。笑うも矧に至らず。怒るも詈るに至らず。疾止めば故に復る」の前半部との間に共通性が認められる。

⑤君子曰、孝子事父母、以食惡美下之。(下段缺失)【第九簡】

⑤は③④と同様「君子曰、孝子」ではじまる共通の形式をもち、これらが一連の章段であつた可能性を示唆する。下段を缺失するため内容を把握し難いが、孝子は父母におつかえする際、食べ物の良し悪しを問題にしないことを説いたものと推測される。

⑥君子曰、弟、民之經也。○然則免於戾。【第十簡】

⑥には、弟(悌)は民のもとづくべき經であり、年少者は必ず年長者の命をきき、身分の低い者は必ず

身分の高い者の命をきく、そうすれば混乱を免れる、との上位者に対する下位者の一方的な服従が説かれ。①から⑤までが、主として父母に対する孝を説くのに対し、この段落は、父母以外の目上の者に対する徳目である弟(悌)を主題としており、おそらく『内礼』は、父母に対する孝に統いて、年長者や身分の高い者に対する弟(悌)にかかる当為を説く構成であつたと推測される。

⑦ (上段缺失) □無難。母忘姑姊妹而遠敬之、則民足有禮、然後奉之以中準。【附簡】

⑦は、上段を缺失するため把握し難いが、父親の姉や妹であるおばをないがしろにせず遠ざけて敬うことが民の礼節の保有に結び付くことが説かれており、民の統治という視点において⑥との共通性があるがわれる。

なお、附簡にみえる上段の缺失は、第四簡から第九簡までの六簡とほぼ同位置にあり、これらの竹簡が比較的近接した場所に存在したことを物語つている。したがつて、附簡が『内礼』の竹簡であることはほぼ確実と見てよいであろう。

各段落において言及したことく、『内礼』は『大戴礼記』曾子立孝篇・曾子事父母篇・『儀

礼』士相見礼などの伝存諸篇と関連する内容をもち、とりわけ『大戴礼記』曾子立孝篇・曾子事父母篇との間に密接な対応関係が認められる。したがつて、『内礼』と『大戴礼記』曾子立孝篇・曾子事父母篇との比較検討は、これまで不明な点が多かつた『大戴礼記』の資料性や、『大戴礼記』曾子十篇のもとにになったとされる『漢書』芸文志所載『曾子』十八篇の成立過程、さらに曾子との密接な関係が指摘されている孝思想の展開などを考察する上で、重要な意義をもつと考えられる。

『内礼』に関する研究は、現在「簡帛研究」網站を中心に行われておらず、その問題は、以下の三点に整理される。(一) 文字釈読の問題、(二) 竹簡排列の問題、(三) 『大戴礼記』曾子諸篇との関連の問題。

(一)については、すでに廖名春「読楚竹書《内豊》篇劄記(一)(二)」をはじめとする重要な見解が提出されており、今後これらを集約して、より妥当性の高い釈文を作成していく必要がある。

(二)については、魏宜輝「讀上博簡楚簡(四)劄記」が、李朝遠氏の原案に対して、曾子事父母篇との対応から、第六簡と第八簡とを接続させる修正案を提起し、これ以後「簡帛研究」網站に発表された論文の多くは、修正案に従う傾向にある。第六簡と第八簡とに問題を限定すれ

ば、修正案は確かに曾子事父母篇との対応を踏まえた妥当な見解といえる。しかし、構成面に注目すると逆に修正案にはいくつかの問題が指摘され、曾子事父母篇との対応は必ずしも原案を否定する根拠とは見なし難いことが明らかとなる。さらに句読符号や章符号との対応関係から、修正案における構成上の齟齬が具体的に裏付けられることから、竹簡の排列は原案のごとく第六簡と第七簡とを接続すべきであると考えられる。

(三)については、梁涛「上博簡《内礼》与《大戴礼記・曾子》」にまとまつた議論がみられる。梁氏は、「大戴礼記」曾子十篇を「曾子」の一部と見なす立場から、「内礼」と「大戴礼記」曾子立孝篇・曾子事父母篇との関連に注目し、「内礼」と「曾子」とは相互に本文が異なるものの、その思想には共通性が認められることから、「内礼」と「曾子」との間に一定の関係が存在することは肯定できると結論付けている。さらに梁氏は、第一簡背面の篇題「内礼」と「礼記」内則篇との関連を指摘する李朝遠氏の見解に対して、内則の「内」が家族にかかる「門内の治」を意味するのに対し、「内礼」の「内」は「内なる心」を指して言つたものであるとの見解を提示している。

なお、「内礼」と「大戴礼記」曾子立孝篇・曾子事父母篇との比較分析、竹簡排列の問題などの詳細については、

本誌所載の拙稿「上博楚簡『内礼』の文献的性格—『大戴礼記』曾子立孝篇・曾子事父母篇との比較を中心に—」を参照されたい。

### (3) 主要叢文・注釈・研究

- ① 魏宜輝「読上博簡楚簡(四)剖析」(「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月十五日)
- ② 董珊「読《上博藏戰國楚竹書(四)》雜記」(「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月二十日) ③ 廖名春「讀楚竹書《內豐》篇劄記(一)」(「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月二十日)
- ④ 廖名春「讀楚竹書《內豐》篇劄記(二)」(「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月二十日)
- ⑤ 曹建敦「讀上博藏楚竹書《內豐》篇札記」(「簡帛研究」網站、二〇〇五年三月四日)
- ⑥ 曹建敦「用新出竹書校讀伝世古籍札記一則—上博簡《内豐》校讀《大戴礼記》一則」(「簡帛研究」網站、二〇〇五年三月四日)
- ⑦ 梁涛「上博簡《内礼》与《大戴礼記・曾子》」(「簡帛研究」網站、二〇〇五年六月二十六日)

(福田哲之)

## 『相邦之道』(そうほうのみち)

### (1) 書誌情報

竹簡全四枚。そのうち、三枚は残欠簡で、ほぼ完全なのは第四簡のみ。その第四簡も二枚をつなげた整簡である。そこから推定される竹簡の形状は、簡端は不明、簡長が約五十一センチ。編綫位置も不明。総字数は一〇七字で、そのうち合文が五、重文が一。これら四枚の竹簡は字体が近く、内容を照らし合わせて一組の文書と判断されたようである。第四簡が巻末とされたのは、末尾に墨鉤が付されており、以下が留白となっているためである。他の三簡の配列については確証がない。

篇題はなく、整理者が内容から「相邦之道」と命名したようである。

### (2) 内容と研究概況

本編の内容は、整簡が一枚のみという状況から、どのようなものであるかを述べることは困難であるが、第四簡に「孔子退きて、子貢に告げて曰く」という字句が見える。『論語』に、孔子がある為政者と会談をして退席した後に、控えていた弟子にその会談の内容を告げる場面があるが、この『相邦之道』の場面設定も同様であった

可能性が高い。前掲の字句に続く内容は「吾れ君に見ゆるに、邦を有つの道を問わぬして、邦を相くるる道を問う」とあり、「ここから孔子と「君」ととの問答の主題が「邦を相くる」方策に関することだつたことが推定できる。そのために編名も『相邦之道』となつてているわけである。

では、その國家統治を補佐する方策に関する「君」と孔子の問答の具体的な内容はどのようなものであつたかが知りたいところであるが、前述のように本編の竹簡の状況が悪く、第四簡の前に配列された三枚の残欠簡のわずかな部分から推定するしかない。その場合、注目されるのは第二簡にある「□□□□人、可謂相邦矣。公曰、敢問民事。孔子（以下、欠）」という記述であり、そこから具体的な内容としては「民事」をいかにするか、ということが問答されていたのではないかと考えられる。その視点から、いち早くこの『相邦之道』の全体構成を推定した論考に、(3) の①に挙げた浅野裕一「上博楚簡『相邦之道』の全体構成」がある。それは『相邦之道』が、いま我々が目にしている四簡プラスα（一～二簡程度）の分量で、以下のようないくつかの構成であったのではないかとの推論を掲げている。

- (一) 孔子を召し出して「相邦之道」の内容を訊ねる、哀公の最初の質問。

(一) 「相邦之道」の内容を説明する、孔子の最初の返答。  
(二) 「民事」の内容を訊ねる、哀公の二度目の質問。

(四) 「民事」の内容を説明する、孔子の二度目の返答。

(五) 退出後の孔子と子貢の問答。

『相邦之道』に登場する「君（公）」は、『上海博物館蔵戦国楚竹書』での釈読者の張光裕氏が魯の哀公と推定しており、浅野氏もそれに従っている。今後の『相邦之道』に関する研究は、この浅野氏の論に対する賛否を出发点として、それぞれに展開されいくことになると考えられる。たとえば、すでに（3）の②陳論考がある。そこでは、第四簡末尾にある孔子が子貢に「吾子の答うるや何如」という問い合わせに対する答えとしての二文字「女謔」をどう読むかについて論じられている。「女謔」については、釈読において張光裕氏が「如斯」と隸定しているが、浅野論考ではその字句の前に「斯く」を受ける字句がない以上、ここに「如斯」の二字がくることは考えられないとして、この二字を「汝察（汝察せよ）」と隸定している。陳論考では、浅野氏の論考に沿いつつ、「汝思」とすべきであるとしている。

『相邦之道』が、儒家が国家統治に対し果たしうる補佐的な役割を論じたものであるとするならば、内容的には同じく上博楚簡の『從政』に通じるものがある。こ

の点はやはり『從政』の整理者であった張光裕氏も指摘している。『從政』がどちらかといえば、官僚クラスの実務レベルでの心構えなどに重点を置いており、この『相邦之道』がもう一クラス上の宰相レベルでの話であることをからすれば、儒家がいかにして現実政治に参与していくかを、その参与の仕方に分けて論じ分けていた可能性も考えられ、注目に値しよう。また、浅野論考でも指摘されているが、話の枠組み、哀公と孔子の問答および弟子と孔子の問答という展開の仕方が、おなじく上博楚簡の『魯邦大旱』と一致しており、同一系統の資料である可能性が高いところも、今後の研究においてさらに明らかにされよう。

### （3）主要釈文・注釈・研究

- ① 浅野裕一「上博楚簡『相邦之道』的整體結構」（「新出土文獻與先秦思想重構」國際學術研討會論文集）（台北：台灣大學哲學系、中央研究院中國文哲研究所、輔仁大學文學院、東吳大學哲學系，二〇〇五年二月）。邦題は「上博楚簡『相邦之道』の全體構成」。

- ② 陳思婷「試釋『上博（四）・相邦之道』之『女謔』」（『帛研究』網站、二〇〇五年四月三日）

## 『曹沫之陳』（そうまつのじん）

答から、古代の軍事思想を窺うことができ、兵法書の一  
つとされる。

### (1) 書誌情報

『上海博物館藏戰國楚竹書（四）』において釈読を担当した李零氏は、竹簡数を「整簡」四十五本、「残簡」二十分で折れているものが多く、李零氏は釈読にあたり、折れて上半部だけになつた竹簡と下半部だけになつた竹簡とを綴合し、復元を試みている。李零氏がいう「整簡」とは、そうして復元した竹簡と、残欠のない完簡とをあわせたもののことである。『上海博物館藏戰國楚竹書（四）』の写真を見る限り、『曹沫之陳』の完簡は二十本のみである。簡長は、四十六・八・四十七・五。編綫は三道。両端は平齊。第二簡の背面に「曹沫之陳」と篇題が記されている。

### (2) 内容と研究概況

『曹沫之陳』は、斉に領土を奪われたものの、失地回復に努めることなく音楽にふけっていた魯の莊公が、曹沫の勧めに従つて斉との戦いを決意するに至り、曹沫に対して具体的な陣法を次々と質問し、曹沫がそれに答えるとの構成をもつ、古佚文献である。莊公と曹沫との問

『曹沫之陳』に関するこれまでの研究は、ほとんどが釈読上の問題をめぐるものであり、その兵学思想についての研究は、今のところ浅野裕一氏の論考のみである。

浅野氏によれば、『曹沫之陳』の兵学は、中原で行われていた戰車中心の戦争形態を前提としており、吳越の抗争を背景に成立した十三篇『孫子』の兵学とは異なる、典型的な中原の兵学であるところに特色がある。もつとも、『曹沫之陳』の兵学は、莊公や曹沫と同時代である春秋時代前期（前七七〇年～六四九年）の状況を基本に据えつつも、会戦の形態に関してはそれよりも古い西周期（前一一〇〇年～前七七一年）の伝統を引き継いでおり、その一方で、民の大量動員による兵力数の増加に関しては、それよりも新しい春秋後期（前五二六年～前四〇四年）の状況を取り込んでおり、「新旧の層が累層的に混在する性格を示している」と考えられる。浅野氏は、『曹沫之陳』の成書年代を、春秋後期である可能性が最も高いとする。

『曹沫之陳』の釈読に関する研究の中では、特に竹簡の綴合・復元をめぐる問題が注目される。書誌情報において述べたように、李零氏は釈読にあたり、折れて上半部・下半部だけになつた竹簡の綴合・復元を試みている。

これに対しても陳斯鵬氏や李銳氏、白于藍氏は、それぞれ李零氏とは異なる竹簡の綴合・復元を行い、また李零氏の復元した竹簡の排列にも修正を加えて、『曹沫之陳』の新たな釈文を発表している。

出土した時点で既に本来の編綴が失われ、しかも多くの場合残欠が見られる竹簡資料の釈讀にあたっては、釈讀者が、自らの理解したその文献の文脈を手がかりとして、竹簡の排列や竹簡そのものの綴合・復元を試みることはある。しかしながら、かかる復元に際して、何らかの客観的な根拠が存在するのであれば、それに従わなければなるまい。竹田は、こうした客観的な根拠として、竹簡の契口（竹簡を固定するために、編縫部に刻まれた楔形の切れ込み）が有効であると指摘した。すなわち、『曹沫之陣』に属する竹簡の大多数は、契口が竹簡の文字面に向かつて右側に位置するが、左側に位置する竹簡が四箇存在する（いずれも下半部だけの残簡）。これまで公開された上博楚簡と郭店楚簡の写真を見る限り、完簡上に左右の契口が混在する現象は確認できない。にもかかわらず、李零氏らが行つた竹簡の綴合・復元の一部には、一本の竹簡上に左右の契口を混在させたものが含まれている。竹田は、こうした復元は成り立たないことを指摘した。

『曹沫之陳』は、全体の分量が多いため相当数の未釈字が残されている。また竹簡の残欠により前後の接続が明らかではない部分も少なくない。『曹沫之陳』の釈讀に関しては、今後も問題が数多く指摘されると推測される。

### (3) 主要釈文・注釈・研究

- ① 浅野裕一「上博楚簡『曹沫之陳』の兵学思想」『中国研究集刊』第三十八号、二〇〇五年十二月)
- ② 竹田健二「『曹沫之陳』における竹簡の綴合と契口」『東洋古典学研究』第十九集、二〇〇五年五月)
- ③ 李銳「『曹劇之陣』重編釈文」（『簡帛研究』網站、二〇〇五年五月二十七日）
- ④ 范常喜「（上博四・曹沫之陳）”車釐皆裁（載）”補議」（『簡帛研究』網站、二〇〇五年四月十五日）
- ⑤ 白于藍「上博簡『曹沫之陳』釈文新編」（『簡帛研究』網站、二〇〇五年四月十日）
- ⑥ 高佑仁「読『曹沫之陣』心得兩則：「幾」、「非山非沢，亡有不民」」（『簡帛研究』網站、二〇〇五年四月三日）
- ⑦ 蘇建州「（上博四）曹沫之陳》三則補議」（『簡帛研究』網站、二〇〇五年三月十日）

網站、二〇〇五年三月四日)

⑨蘇建州「《上博（四）曹沫之陳》補釆一則（二）」（「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月二十五日）

⑩蘇建州「《上博（四）曹沫之陳》補釆一則」（「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月二十五日）

⑪李銳「《曹沫之陳》釆文新編」（「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月二十五日）

⑫陳斯鵬「上海博物館藏楚簡《曹沫之陳》釆文校理稿」（「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月二十日）

⑬范常喜「《曹沫之陳》“君言無以異於臣之言君弗盡”臆解」（「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月二十日）

⑭廖名春「楚竹書《曹沫之陳》与《慎子》佚文」（「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月十二日）

⑮陳劍「上博竹書《曹沫之陳》新編釋文（稿）」（「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月十二日）

⑯廖名春「讀楚竹書《曹沫之陳》劄記」（「簡帛研究」網站、二〇〇五年二月十二日）

（竹田健二）

## 上博楚簡形制一覽表

本表は、馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書（一）』（上海古籍出版社、2001年11月）、『同（二）』（上海古籍出版社、2002年12月）、『同（三）』（上海古籍出版社、2003年12月）、『同（四）』（上海古籍出版社、2004年12月）に基づき、公表分全21文献について、その形制をまとめたものである。

No.	分類	名 称	枚数	簡長(cm)	編號	端端	先簡	後簡	字 数	篇 题	備 考
1	一	孔子詩論	29	55.5	三道	陽	1	28	1006	『子羔』『魯邦大旱』同筆／第2～7留白簡	
2	一	紳 衣	24	約54.3	三道	陽	8	16	978		
3	一	性 情論	45	約57	三道	平陰	7	38	1256		
4	一	民之父母	14	45.8	三道	平陰	1	13	397		
5	二	子 羔	14	虎牘最長54.2	三道	陽	0	14	395	「子羔」第5簡背面	『孔子詩論』『魯邦大旱』同筆
6	二	魯邦大旱	6	54.9/55.4	三道	陽	2	4	208		『孔子詩論』『子羔』同筆
7	二	徒政（甲篇）	18	約42.6	三道	平陰	9	9	519		『徒政（乙篇）』同筆
8	二	徒政（乙篇）	6	42.6	三道	平陰	1	5	140		『徒政（甲篇）』同筆
9	二	昔者君老	4	44.2	三道	平陰	3	1	158		
10	二	容 成 氏	53	約44.5	三道	平陰	37	16	2062	「訛城氏」第53簡背面	
11	三	周 易	58	44	三道	平陰	44	14	1806		符号（6種）
12	三	中 弓	28	約47	三道	平陰	3	25	520	「中弓」第16簡背面	附簡1簡（24字）
13	三	瓦 先	13	約39.4	三道	平陰	13	0	496	「瓦先」第3簡背面	
14	三	彭 祖	8	約53	三道	平陰	3	5	291		
15	四	采風曲 目	6	虎牘最長56.1	?	平陰	0	6	149		
16	四	逸 詩	6	虎牘最長27	?	平陰	0	6	138		爻交鳴篇（4簡）・多薪（2簡）
17	四	昭王毀室	10	約44	三道	平陰	6	4	388		昭王毀室（196字）昭王與寢之牋（192字）
18	四	東大王泊旱	23	約24	離 隅	23	0	601			
19	四	內 豊	10	44.2	三道	平陰	4	6	376	「內豐」第1簡背面倒畫	附簡1簡（22字）
20	四	相邦之道	4	虎牘最長51.6	?	平陰	0	4	107		
21	四	曹沫之陳	65	約47.5	三道	平陰	45	20	1784	「散藪之戰」第1簡背面	

わせて一本の竹簡に復元する際に、客観的な手がかりとして有効と考えられる。

前回『中国研究集刊』第三十三号「新出土資料と中国思想史」においては、「郭店楚簡各篇解題」「上博楚簡各篇解題」(第一分冊・第二分冊)の「書誌情報」にみえる用語について解説を加えた。ここでは引き続き、本号所収「上博楚簡」解題(第三分冊・第四分冊)の「書誌情報」にみえる用語を中心に解説を加える。

1 契口 竹簡の編綫部に刻まれた切れ込みのこと。竹簡を編綴し冊書を作成する際、竹簡を固定するための必要から刻まれたと考えられる。竹簡の文字面に向かって右側面に位置するものを右契口「図1」、左側面に位置するものを左契口「図2」と呼ぶ。郭店楚簡と公開済みの上博楚簡を見る限り、右契口の存在する竹簡が圧倒的に多く、左契口の存在するものは一部に限られる。また残欠した箇所のない完全な竹簡に、左契口と右契口とが混在する現象は確認されていない。郭店楚簡・上博楚簡では、或る一本の竹簡上に左右の契口が混在することはなかつたと推測され、契口の位置は、折れた竹簡同士をつなぎ合

## 2 整簡

上下二つ、或いは三つに折れた残簡同士を接合して、文字の欠落が無い一本の竹簡の形にしたもの「図3」。但し、『上海博物館藏戰國楚竹書』においては、接合して一本の形にした竹簡と、もともと完全な形を保っている竹簡について、各文献の釈讀者の間に用語の不統一が見られる。例えば、『緇衣』の陳佩芬氏は、両者とともに「完簡」と呼び、また『曹沫之陳』の李零氏は逆に、両者をあわせて「整簡」と呼んでいる。しかし、もともと完全な形を保っている竹簡を「完簡」、接合して文字の欠落が無いとした竹簡を「整簡」と、それぞれ区別して呼ぶべきであろう。

## 3

首簡・末簡 上博楚簡『周易』においては、一卦(卦画・卦名・首符・卦辞・爻題・爻辭・尾符)につき竹簡二・三本が使用されているが、その最初の簡を「首簡」といい、最後の簡を「末簡」という。なお、「首符・尾符」については、「4

標号 ⑤首符・尾符」参照。

・篇末符号

『瓦先』第13簡

【彭祖】第8簡

分冊所収の文献には、以下のような例が見られる。

- ①墨釦……方形状の墨点。小方点ともいう。句読点や章・篇の末尾を示す。【図4】
- ・句読符号『東大王泊皇』第8簡・第16簡・第21簡・第22簡

②墨鉤……鉤状の記号。句読点や章・篇の末尾を示す。

篇末符号の場合は、原則として墨鉤以下が文字のない留白となる。【図5】

・句読符号『内礼』第2簡～第5簡

『曹沫之陳』第2簡・第7簡～第10簡・  
第17簡・第22簡・第28簡・第33簡・第  
42簡・第45簡・第47簡～第49簡

・章末符号『内礼』第6簡・第7簡

※『内礼』はすべて墨鉤の符号をもつが、句

読符号は竹簡の右端にやや小さく付される  
のに対し、章末符号は簡の中央に大きく付  
されており、両者の間に相違が認められる。

③墨節……横に引かれた墨線。章・篇の末尾を示す。【図6】

・章末符号『昭王毀室』『昭王與翼之脾』第5簡（『昭  
王毀室』と「昭王與翼之脾」との区切れ  
に位置する）

※『逸詩』『交交鳴鶩』第4簡の末尾には「▼」  
のような形体の符号が見られる。これは  
「交交鳴鶩」篇の末尾を示す篇末符号と  
見なされるが、本文が竹簡の下端ギリギ  
リで終わり、しかも末字の「大」を小さ  
く記入した後に付されているため、留白

は認められない。こうした状況から、こ  
の篇末符号は、「多薪」篇末尾と同様の墨  
鉤をスペースの関係で短小に記したため、  
結果的に「▼」のような形体となつた可  
能性が指摘される。

『昭王毀室』昭王與翼之脾』第10簡  
『相邦之道』第4簡  
『曹沫之陳』第65簡

④短横・小点……短い横画や小さな墨点（類似して明確に判別しがたい例もある）。句読点や章の末尾を示す。なお『采風曲目』においては、曲目の末尾を示す。〔図7〕

・句読符号

『中弓』第5簡

『互先』第5簡・第7簡・第11簡

『采風曲目』第1簡～第6簡

『昭王毀室 昭王與翼之脯』第5簡

『相邦之道』第2簡

・章末符号

『逸詩』「交交鳴鶩」第2簡・第3簡

⑤首符・尾符……上博楚簡『周易』にある六種類の符号。九種類とする説もある。首簡の、卦名の直後、卦辞の直前にある符号を「首符」〔図8〕といい、末簡の、爻辞全体の最後にある符号を「尾符」〔図9〕という。

⑥重文号……同一字を重ねる符号。踊り字。「三」で表示される。〔図10〕

⑦合文号……合文を示す符号。合文とは、表記法の一

形式として、あるいは書記労力の軽減のために、異なる二字（例外的に三字の場合もある）の漢字を一字に合して表記したもの。合文で表記される二字には、二字をそのまま合した例〔図11〕、点画の一部を共有する例〔図12〕、偏旁を共有する例〔図13〕などがある。合文は重文と同じ「ニ」で表示され、文脈によって両者を判別したものと考えられる。

〔図1〕右契口『曹沫之陳』第9簡



〔図2〕左契口『曹沫之陳』第15簡



〔図3〕整簡『曹沫之陳』第1簡



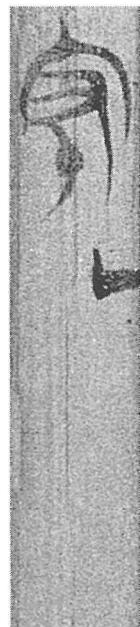
〔図4〕墨釘・句読符号『東大王泊旱』第8簡



〔図7〕短横・句讀符号『相邦之道』第2簡



〔図5〕墨鉤・篇末符号『彭祖』第8簡



〔図6〕墨節・章末符号『昭王毀室 昭王與翼之脣』第5簡



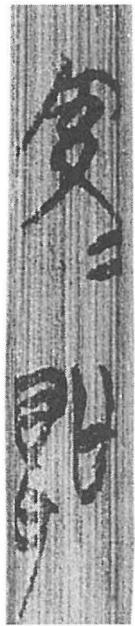
〔図8〕首符・卦名直後の符号『周易』第28簡



〔図9〕尾符・爻辞直後の符号『周易』第29簡



〔図10〕重文号・『逸詩』「交交鳴簋」第2簡「交」



〔図11〕合文号・『中弓』第24簡「一 日」（「一」と「日」）  
とを直接合した例



（竹田健二）

〔図12〕合文号・『曹沫之陳』第16簡「上下」（「上」の  
第三画と「下」の第一画とを共有する例）



〔図13〕合文号・『東大王泊旱』第10簡「子孫」（「子」  
と「孫」の左偏とを共有する例）

